

アプローチできないで終わってしまうことがよくあります。
<インタープリテーションに必要な4つの要素>
 インタープリテーションはアメリカが先進地です。手法が研究されインタープリテーションに必要な4つの要素が提示されています。

一つ目は、テーマ(ストーリー・メッセージ)を作ることです。単に「トピック」の解説をつなげるのではなく、テーマ(参加者と共有したいメッセージ・ストーリー)を考え、記述して計画する必要があります。ツアー参加者と最後に共有したい大切なメッセージを文章化することが必要。これは基本中の基本です。例えば、「道と物流の変遷」というトピックを扱うとして、「きょうの私のガイドのテーマは『道と物流の変遷』です」といったことを言いそうですが、これはテーマではなく、話題の領域に過ぎません。テーマというのは、例えば、「時代は変わっても『道』は人の暮らしに欠



かせないものや情報を日々流通させている」というようにメッセージ性やストーリー性を持った文章で記述します。テーマは、ガイドの最後のまとめとして話すような、ガ

イドにおいて最も伝えたいメッセージです。例えば、ツアーの最後に「今日見てきたように、時代は変わっても、『道』というのは、人々の暮らしに大切なものや情報を日々流通させてるんですね…。今日の私のガイドは終わります」と話したら、ガイドが上手にまとまると思いませんか？ その最も重要なメッセージを計画のときに書いておくことが進められます。ガイドを実際に行う人ではなく、プランナー、つまり行程をプランニングする人がインタープリテーションを計画して、それに沿ってガイドの人が解説をするといったことも行われています。

二つ目は、適切な構成(順序立て)です。主要なテーマを3つ、4つの例で説明するのがいいといわれています。解説する資源の時代が前後すると参加者も混乱するので、適切に順序立てることが重要です。

三つ目は、参加者に関連させることです。人というのは、自分に関係ない話は聞けないし、耳に入ってきません。自分が語りたいストーリーをそこに参加している人に上手に関連させていくことが大切です。

四つ目は、楽しくすることです。人の人生など、どうしたら楽しく歴史の話聞いてもらえるかということです。いずれにしても、お勉強会ではなく、旅行の一部としてインタープリテーションが行われるので、「楽しかった」という感想をもたれるようにすることが最も重要です。

ではなく、実物や事象の背後にある意味と相互の関係をひもといて解き明かすことが重要です。自分たちを取り巻く環境に注意を向け、それらに対する主体的な関わりを促す活動でもあるので、心を高め、理解を深め、なおかつ私たちそのものがその地域にどんな活動ができるのかということ意識することも重要になります。

イ)「お客様に伝わるガイドとおもてなしの技」

講師:大西信正(株式会社生態計画研究所・早川事業所長)

<インタープリテーションは知識を伝えるだけではない>

インタープリテーションは、誰もが持っているちょっとした好奇心を最大限に利用して、ビジター、お客さまの知的・精神的な向上を促すようなもので、関心を高めていくことが大切です。単に知識を伝えるだけ

<気づきを与え体験を促す>

「いい匂いがする」「触ってみよう」といった気づきや、体験の視点をほのめかすことで、実際に匂いがかぐ、触るといった行動を促します。興味が生まれた時に、新たな視点ができると、その視点が少し自分のものになります。ガイドが記憶を押し付けるのではなく、自分の体験と記憶にしていく過程が大切です。また、ガイドが言葉で上塗りするのではなく、見ている方たちが自分の体験に置き換え、自分の発見に置き換えていくことが重要です。ガイドの役割は、体験をどう促すか、体験をどのようにサポートするかということになります。

ガイドは体験や発見を豊かにするサポートに徹することが大切です。体験の中で、知識や頭だけではなく、五感を使っているいろんなものを感じ、気づきます。五感をベースに知識や情報を乗せていく作業です。



どうしても体験できないのであれば、見えないものは見える形にすることが大事です。

<ガイドのホスピタリティ>

ホスピタリティとは、気が利くということ

ことです。ガイド講習会の現場では、「太陽にむかっているのでまぶしくないですか」「この場所立ったら、後ろが崖で危なくないですか」などに気付いてもらいます。常にツアーの参加者の立場になるということを徹底しなければなりません。極意は、参加者本人は気が付いていない必要なものを、ガイドが先に気付いて提供することです。そのためには、参加者の背景を探り、参加者の様子をよく観察しないとできません。おもてなしの心を持って対応するというのも、ガイドツアーではとても大切なことです。



講師:古瀬浩史(右)
講師:大西信正(左)

<ヒントを与えてもらった上で正解を解説する>

1度にたくさんの情報を伝えないようにすべきです。自分で経験してないものは詰め込めないし、忘れてしまいます。興味を抱いたことに、ガイドが答えを全部出してしまうと心が動きません。まずは、簡単な問いを投げかけて興味を引き出し、体験を促します。そこでどう感じるか、自らの気づきを待って、自分の言葉で話してもらいます。その上でガイドは答え合わせをします。興味が高まったところで、更に専門的な解説を加えると、ストンと内容が入り、新しい知識に喜びも生まれます。感動ポイントを隠し、最後に伝える方法も効果的です。例えば、苦勞して歩きにくい古道を歩いて辿り着いた山城で、敵が攻めづらくなっていることを伝えられると感動が大きくなります。その上で、また同じ道を見ると更なる興味と理解が深まるのではないのでしょうか。

<幸せをよぶガイダンス>

ツアーに参加し、インタープリテーションを通して楽しかった、また参加したいという気持ちを高めてもらうには、その時が幸せだったと感じてもらうことが重要です。幸せを感じる3つの条件は、「交流」「自分の存在」「感謝(社会貢献)」だと考えています。こうした気持ちが芽生えれば、さらに幸福度は高まるでしょう。この中でも特に大切なのは「交流」です。ガイドとの交流、参加者間の交流、ツアーの途中で会った地元の人たちとの交流。この交流というキーワードをどのように使い、実現していくかということが、インタープリテーションのカギだといえるでしょう。